

---

# 東方災生変

DHMO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方災生変

### 【Nコード】

N5350X

### 【作者名】

DHMO

### 【あらすじ】

博麗神社消失から十五年後、厄介な青年と厄介な相方が幻想入りする話。この話は稚作「東方魂合変」の次回作に当たる話です。出来が悪いですが前作の方もどうぞ

XXX：そして赤い青年は（前書き）

初めての人ははじめまして。前作からついて来てくれた人はお待ちせしました。漸く第二部のスタートです

前作とは違って重暗い話になってしまいかもしれませんが、その辺りは申し訳無いです。楽しんでいただける様、心血注いでいきます。

それではプロローグをどうぞ

## XXX：そして赤い青年は

見た事の無い和風の家に、私は寝転んでいる。視界には茶色い木の天井。身体は指と目しか動かせず、自分で立ち上がる事も出来ない。

風が流れて涼しくて、草木の揺れる音が柔らかくて、心地良くて、今にも眠りに落ちてしまいそうだ。

けれど暫くすると、急に視界が動き出す。頭と胴の後ろに体温を感じた。誰かが私の事を持ち上げている様だ。がさつな扱いをされて、私の眠気は何処かへ飛んでいってしまった。

何時もの私なら不届き者に御札の一枚や二枚投げてやるけれど、今の私はされるがまま。不快さが無いのがせめてものの救いだ。

浮かび上がっては元の高さに落ち、上がっては落ちる景色。どうやら、高い高いをされているみたい。これで喜べる赤ん坊と言える時期はとうに過ぎた筈なのに、とても楽しい。

この感覚が、私を支配している。この「空くうに浮く」感覚、「空そらを飛ぶ」感覚が、私の全て。

何故かは分からない。きつと、この時が私の持つ最初の記憶だから。

寺子屋に通う位の年頃だろうか。不思議な服を着た女の子が、朝霧で霞む長い長い石段の一番下に座っている。赤い袴を腕にくっ付けている様な白い袖で覆っているのは、きっと膝を抱えているから。黒髪が俯いた表情を隠し、起きてるのか寝ているのかも分からない。だけど私には、何故かその子が寂しがっている気がした。

どうしたの？

私が声を掛けると、女の子は顔を上げる。その顔は、予想に反して不機嫌そうな顔だった。

誰？ なんの用？

ぶっきらぼうな声。ジトツとした目によく似合う声で、少し可笑しい。

私はマリサ。アナタは？

……レイム。で、なんの用なの？

レイムの隣に腰を降ろしながら、その問い掛けについて頭を捻る。無計画なのは私の悪い癖だ。取り敢えず、思い浮かんだ事を言ってみよう。

実は私、授業をサボったんだ。だから、その暇潰し。

……暇潰しに話し掛けたの？

またジトリ。不機嫌なのを示しているのだろうが、どう見ても可愛い。ここで笑ってしまえば本格的に機嫌を損ねそうなのでグツと堪える。

けど、あなたも暇でしょ？

暫くの沈黙は、恐らく肯定の意だろう。まだ日が高いこの時間帯に外を出歩く子供はそうそういない。寺子屋での初等教育は必要、と解いて回った先生が昔いたらしい。今も存分に教鞭と額を振るっているだろう。

だとすれば、レイムは何故ここにいるのだろう。私の様にサボったのだろうか。

……博麗。

え？

今度は否定的な目つきは伏せられ、言葉だけで私に語りかける。

博麗の巫女ってだけで、なんでもかんでも詰め込まれるの。ほんと、バカみたい。

……ハクレイ、の、巫女……。

何処かで聞いた。ココ幻想郷の管理者だとか、守護者だとか。およそ人間とは思えない性能の巫女。

レイムは、ハクレイの巫女なんだ？

見習い未満のね。先代巫女に拾われたのが運の尽き、だって。こちらら赤ん坊の頃だったの。

大人びた振る舞いだと言うのに、頬を膨らませたりする仕草や表情は子供そのものだ。行動と言動と外見がミスマッチして、実年齢を計りづらい。

巫女って、スツゴい強いんでしょ？ 何が出来るの？

我ながら、分かり易く子供らしい質問だ。ブツブツと文句を言うレイムも、そんな質問で毒気を抜かれてしまったらしい。

少しだけだけど、飛んだり、御札書いたりとか、五行の初歩とか……

ゴギョウ？

聞き慣れない言葉に首を傾げる。うーん、と少しばかり唸ると、突然レイムが立ち上がった。長い黒髪と白い袖が揺れる。

こつこつモノよ。

何処からか取り出した紙片。ミミズがのたくった、と言うには少しばかり気品を感じる線が描かれていたが、そんな考えは次の瞬間に消え去った。

水生木、疾れ！

例えるなら、雷光の河。目の前の少女が構えたタダの紙切れから、白い奔流が産み出された。

これこそが迅雷、と言うのだろうか。大地を焦がす儂い光を眺めながら、自らの少ない語彙から捻り出す。

これが、私の原風景。

稲光に、『魔法』に魅せられた私が、この時生まれたんだ。

罪。

それは、自分の歩んできた道。

それが、自分の存在条件。

一生の苦楽を共にし、永遠に対峙する半身。

最初の罪を犯した時こそが、自分が世界に認められた時だった。

紅い霧に包まれ、非現実の帳が降りる幻想郷。

紅い風景を二人の少女は飛ぶ。

紅い眼の悪魔はそれを待ち構える。

紅い狗は刃を研ぐ。

紅い門番は眠りから覚めず。

紅い妖精達は何時も通り。

そして赤い青年は



XXX：そして赤い青年は（後書き）

いきなり紅魔郷スタート……と思いきや、次話からは主人公の過去  
→ 幻想入り前に視点を移します  
相変わらず書き貯めていないのでお待たせしてしまいましたが、み  
んな待つてくれッ！

……この時点で主人公が分かった神がいるのであればメッセでお願い  
します。ネタバレは出来るだけ控えてーな

001：二種の来訪者（前書き）

第一部では直していなかった一字空けや行間詰めを実行してみたり  
そんな事の前に執筆速度と内容の厚さを兼ね備えたいと思った今日  
この頃皆さん如何お過ごしでしょうか

## 001：二種の来訪者

ある県、ある山間部の町の、それなりの高さの山の上に立てられた神社。それなりの縁起と御利益があるらしく、昔からそれなりに信仰されていた、らしい。

らしいと言うのは、正直自分では信仰されているのかどうかなんて分かったものではないからだ。担ぐ筈の御神輿は蔵で埃を被り、賽銭箱は閑古鳥の巣と化している。こんな現状では、本当に神様なんでモノを奉っていたのかどころか、宗教として成り立っていたのかすら怪しい。

社務所と居住区と本堂が重複してるし、そもそも御神体が無い。一応蛇かなんかの彫刻はあるけれど、子供の手遊びで出来たんじゃないかと思うぐらいの代物だ。

そんな訳で、休日にわざわざ来る様な物好きもおらず。

「…………ふう」

二十歳の自分一人で勉学に勤しんでいても全く問題無い。誰か雇いたくても金が無いし、雇う必要が無いのが本音だ。

机上の参考書を一旦片付け、冷蔵庫の中から飲み物を出そうとする。生憎とお茶入れに入ったそばつゆしか無い、と気付いた時には吹き出していた。

口直しに常備している栗饅頭を出す。表面がなにやら緑色のモノに包まれていたのでゴミ箱に投げ入れる。

「……買い出しいくか」

生来の出不精が憎らしくなりながらも、高校のジャージから黒いシャツとジーンズに着替え、ポケットに薄い財布を入れる。誰が入れるかも分からない賽銭と肉体労働のバイトだけでは生活費も危うい。進学はまだまだ遠そうだな、と先程仕舞った参考書を思い溜め息を吐いていると

ピンポーン

「……………?」

来客を知らせるベルが鳴った。ここ数年使われて無いと言つのによく機能したものだ。などと関心している暇は無く

ピンポーン、ピンポーン

「はいはいはい、今出ますよ」

間髪入れずに二回の呼び出し音。早く玄関に行かなければこれ以上呼び出されてしまうだろうから歩行速度を上げる。

古びた引き戸を出来るだけ優しく開ける。新聞屋なら何時も通り断つてやればいいし、押し売りなら塩でも……そうだ、塩も買つてこなければ。

心の中の買い出しリストにペンを走らせつつ、自分呼び出した者を確認する。

「こんにちわ。京都の 大学『秘封倶楽部』のマエリベリー・ハ

「ーンと申します」  
「……………はあ……………？」

予想外、想定する事が出来ない範囲からの訪問者が現れた。

まず見た目。金髪の女性                      しかも自分と同年代                      な  
ぞついで見た事が無い。それにそんな人が丁寧にお辞儀をしながら  
流暢に日本語で喋っているとは二重に驚く。端麗な顔立ちなら尚更  
だ。変なフリルの帽子とおばさんが着そうな紫の服は減点ポイント  
だが。

その後ろには、黒髪の女性。金髪女性とは違ってワイシャツにネ  
クタイ、黒いスカートに黒い帽子と、白黒とした服装だ。どことな  
く男っぽく感じてしまうが、スカートを穿いているから女性だろう。

「あー……………ええつと……………大学の学生？                      さんが、どうしてウチに？」

「えつ」  
「えつ」

しどろもどろに問うと、奇妙な掛け合いの後に呆けた顔をする女  
性……………ハーンさん。寧ろ呆けたいのは自分の方なのだが、と思っ  
ていると、確認する様にハーンさんが訊いてくる。

「あの……………確か一週間程前に、電話で御連絡を差し上げた筈ですけ  
ど……………。此方の神社についての取材をさせて頂けないかと」

……………万年受話器に埃が被ってるウチに電話なんて掛かってくる事  
があっただろうか。間違い電話すら無いし、友人からの電話なんて  
ものは掛かってくる訳が無い。

「あゝ、その事なんだけどさ、メリー」

バツが悪そうに頭を掻きながら、ハーンさんの後ろに立っていた対照的な日本人女性。二人の共通点と言えば、種類は違えど帽子を被っている事だろうか。

メリー……恐らくは愛称だろう。そう呼ばれたハーンさんは、黒髪女性の方に振り返る。一瞬だが、綺麗な顔立ちが歪んでいた様に見えた。

「蓮子……まさか」

「いや、連絡しなきゃなーとは思ってたんだよ？ だけどまさか連絡先書いた紙を無くしちゃうとは思ってなくてねえ。仕方無いからアポ無しでもどうにかなるかーって」

あれだ、良く言う割れ鍋に閉じ蓋と言うか、凸凹コンビと言うか、そんな感じがする。割れ鍋の場合は亀裂が致命的過ぎて、凹なら深すぎて底が見えない位だろうけど。何故か。ハーンさんのうなだれっぷりが似合い過ぎていたから。

「ハアア……確認しなかった私が悪いわね……」

長い溜め息を吐き終わると、恥ずかしそうに顔を赤らめて此方を向くハーンさん。咳払いで場を仕切り直そうとしても無駄ですよ。

「大変申し訳ありません。此方の不手際で連絡せずに伺ってしまい……その様で」

件の不手際の人は悪びれる様子は全く無く、口笛まで吹いて忘れようとしている。今時そんな誤魔化し方もどうだろう。

「いや、別に連絡云々は良いんですけど。一体、ウチにどんな用事があるんですか？」

先程言っていた『秘封倶楽部』と言う単語。部活……大学だとサークルか？の類なんだろう、多分。そのサークルの名前を出すって事は、サークル活動の一環で此処に来たと考えるのが妥当だ。とすれば歴史関連か、次点で日本文化関連か、無いとは思うが大穴、宗教関連か。

「それについては私、宇佐見蓮子がお答えしまっす！」

僕の疑問を聞きつけると、さっきまでぴーひゃらと口笛を吹き鳴らしていた女性がいきなり食いついてきた。

「私達『秘封倶楽部』はメンバーは二人だけど、良くあるただの霊能者サークルッ！但しッ、霊能者サークルだけど除霊や降霊とかは行わないッ！周りからはまともな霊能活動をした事のない不良サークル、と思われてるがその実態はッ」

ヤケに熱血口調な割れ鍋が取り出したのは紙の束。差し出されるままに手に取り、まず一枚目に書かれた文字を見る。

「……幻想郷？」

「そうッ！我々の目的はその妖怪の隠れ里、幻想郷を見つける事であるッ！」

かつての日本には、いや世界中には幽霊や妖怪、妖精、神様の類がいた。それを否定するには否定出来る証拠は無いし、肯定するには材料が多過ぎる。

だが現代において彼らの目撃情報は余りにも少ない。かつては共

に杯を交わした鬼は消え、圧倒的な力を誇る天狗も失せた。

何故、今現在彼らは存在しないのか？ 死滅したのか、隠れているのか、そもそもいなかったのか。

これらの謎を解く鍵は、各地の伝承に残っている 以上、

『秘封倶楽部報告書：幻想郷』序文より抜粋。

「……お二人が此処に来たって言うのは、まさか……」

「はい、此方の 水香神社すいかの文献を、どうか拝見させて貰えないかと」

流石に立ち話を続ける雰囲気では無くなったので、応接間兼本堂にお二人を通す。粗茶と先程のレポート、菌糸の魔の手から唯一免れた柿<sup>ピー</sup>を載せた机を挟んで、詳しい事情を聞く。

なんでも彼女達、三百年以上前に書かれた外国の書物『幻想ノ郷』（日本語訳）のみを手掛かりに、大学でその研究をしているのだそうだ。『幻想ノ郷』（日本語訳）とやらは読ませて貰ったが、どうにも荒唐無稽なファンタジー図鑑にしか思えない。真つ赤な館に住まう吸血鬼夫婦、妖怪モンスターが支配する山、幽冥に漂う桜、それらを管理する妖怪、巫女。訳が分からないし理解出来ない。

確かに夢物語にしては細か過ぎる。かと言って決定的な証拠にはならない。何故ならこれは

「ご無礼を承知でお願いします。どうか」

「い、いえ、そんな。頭を下げられても……」

中々返答を寄越さない僕に深々と頭を下げる二人。しまった、そんなに渋っているのでは無いのだが。



「多分、古書の類なら蔵にあると思います。お見せするのは勿論構わないです」

その言葉にパツと顔を明るくする二人。ガッツポーズやハイタッチをどうにか抑えている宇佐見さんを横目に、ハーンさんはまたお辞儀をする。

「……その前に。少し、質問して良いですか？」

晴れやかな顔の二人に訊くには、少し悪いかもしれない質問。けれど、僕にはどうしても訊かなければいけない質問。

「その……お二人は、所謂、霊能的なものを信じているんですか？」

「……ん〜？」

初めて、の筈。だけど見覚えと言つか、感じた覚えのある空気。外見は違っていても、此処の土地は印象が強過ぎる。

気の向くまま足の向くまま進んでいたけれど、今度と言う今度は終着点かな？ 前みたいに変な棒を投げられたらヤだけど、そこはプラス思考プラス思考。

「そつだとしたら……まずは腹拵え！ すんませーん、一番良い料理を！」

「らっしやいッ！ ウチのは全部が全部旨いよッ！」

料理人のあんちゃんの御託を聞いていたせいか、どんな店でも安牌のカレーに行き着くまで二十分掛かった。海無し県の癖に浜茶屋のカレーの味がしたのはきつと気のせい。

## 001：二種の来訪者（後書き）

とゆー訳で、初登場の原作組は秘封倶楽部のお二人でした

……と言っても、別に未来な要素は全く無いですがね。現代に二人  
がいたら、的な感じで話は進んでいきます。あしからずー

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5350x/>

---

東方災生変

2011年10月19日09時22分発行